慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	聖イグナチオ・ロヨラ
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.3 (1940. 12) ,p.1a(381a)- 19(399)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:聖イグナチオ・ロヨラ肖像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19401200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖イグナチオ・ロヨラ肖像

聖イグナチオ・ロヨラ

吉田小五郎

一

本年九月二十七日は、あたかも耶蘇會が創立せられ、ローマ教皇パウロ三世（1534—1549）によつて、正式の認可を與へられてから滿四百年の記念日に相當する。我が三田史學會では、之に因んで、耶蘇會、若しくは切支丹史に關する論文を諸家に需め、記念特輯號を編むことゝした。顧れば、我が赫々たる切支丹史上の指導者達は、その八十パーセント以上が、所謂「コンパンヤ」卽ち耶蘇會員であつた。若し假にこの指導者達が、プロテスタントに屬する人々であつたとしたら、日本の切支丹史は自ら性格を異にしてゐたであらう。また一歩を讓つて、同じカトリック教會內にある他の修道會の人々によつて、先驅の位置がとられてゐたとしても、矢張り場面は違つたものになつてゐたであらうと想像される。

私は、こゝ暫く耶蘇會史の幾冊かを通讀して、その事を强く感じた。同時に我が切支丹史の研究に

は、廣く耶蘇會そのものゝ組織、性格、歴史等の研究の忽せにしてならぬ事を痛感した。なほ耶蘇會史も、耶蘇會そのものに好意を寄せるものと、反感を抱くものゝ筆になる、その兩方面に注意する必要があらう。例へば相當辛辣に耶蘇會の裏面を描き出してゐるテオドール・グリージンゲルの耶蘇會史(Theodor Griesinger: History of the Jesuits, 1885.) の如きを一讀して特にさう感じた次第である。

さて、私はこゝで耶蘇會の創立者たる聖イグナチオ・ロヨラの一生を極く簡單に語らうと思ふ。彼の一生を語ることは、要するに耶蘇會の誕生を物語る所以と考へるからである。

二

ロヨラは、通說では、一四九一年十二月二十四日、スペインのギプスコア州 Guipscoa のロヨラ城で孤々の聲をあげたといふことになつてゐる。(時にルーテルは既に九歲の兄である)ともすれば「厩の中」でとあるのは、恐らく、傳へる人々が、彼をキリストに倣はしめんがためであらう。十一人同胞(きやうだい)の末子で、幼名は Enico 或は Iñigo といひ、後に自らイグナチオ・ロヨラ Ignatius Loyola と稱した。彼の父のベルトラン Beltran は一城の主で、この點、我が切支丹傳道の先覺、フランシスコ・ザベリオの父ファンが、ザベリオ城の主であつたのと規を同じくする。なほこゝでいひ落してならないのは、彼等

に聖人とはいひながら、彼等一生の行動をつぶさに顧れば、この事が明白に受けとられる。十三世紀のアッシジの聖フランシスコを詩人的聖者とし、聖ロヨラ、聖ザベリオの如きを英雄的聖人と稱する者ある所以である。

マフェイ (Maffei) に從へば、ロヨラは、幼年期を過ぎると、一時フェルヂナンド、イサベラの朝廷に小姓として仕へる身となつた。然し之は束の間の事であつたらしい。之をさへ彼の野心に歸する人もあるが、耶蘇會に反感を抱く人々は、ロヨラの行動の一つ〳〵を野心に歸するのである。之は極端といふものであらう。その他幼年時代のことは餘り知られてをらぬ。彼は數え年二十六歳になつた時、軍籍に入り、ナジェラ公アントニオ・モーリス Antonio Mourice, Duke of Najara の旗下に身を投じた。軍人となつてから、とかく奔放放肆な所があり、又うき世の虚榮、逸樂は彼の好む所でもあつた、ニーレンベルヒ Nierembeng、ノラルチ Nolarci、ガルシヤ Garcia、エナオ Henao のロヨラ傳にあるやうな、あんな素晴しい敬虔な青年では決してなかつたと、キャンベル (Campbell : The Jesuits, 1534-1921) はいつてゐる。然し、一方では、勇敢、誠實、愼重といふ點で、衆に優れ、殊に人を引きつける力が强かつた。

一五一二年、スペインとフランスとの間に隙を生じ、スペイン軍は、忽ちにして、フランス側に味方したナバール王國の首都パンプロナを占領した。ナバール王は、身を以てフランスへ逃れたが、最後まで王と行動を共にし、遂に同地で客死した宰相ファンは、我がフランシスコ・ザベリオの父であつた。

幾曲折を經て、一五二一年、フランス軍は、此の度位置をかへてパンプロナを守るスペイン軍を攻圍した。この戰で、防禦軍、卽ちスペイン軍の勇士の一人にイグナチオ・ロヨラその人があり、攻圍軍、卽ちナバール、フランスの聯合軍の中に、ザベリオの兄ミゲル、ファンの二人があつた奇遇を忘れてはならぬ。

この年（一五二一年）五月二十一日、ロヨラは最後の攻擊中に、砲彈に見舞はれ、兩脚に負傷した。殊に片脚は重傷で、一部の骨を切りとつて接合するといふ程のものであつた。フランス軍の勇士はおよそ二週間よく彼を介抱した後、親切に彼をロヨラ城へ護送してくれた。久しぶりに故鄕に歸つて再び手術を受けたが、重態で、生死のほども覺つかなく、聖ペトロの祝日（六月二十八日）には、最早や絕望とあつて最期の勤行を行つた程であつた。所が、その夜から奇跡的に回復の徵が見えはじめ、二三日の後には、危險狀態を完全に脫した。

三

回復期に向つたロヨラは、病床の徒然に、色々と本を讀み漁つた。然し根が軍人であつたから大體が"Amadis de Gaul"といつたやうな武勇譚で、之が彼の嬉好に投じたが、たま〳〵信心深い一友人から

sus Christ のスペイン譯と、もう一冊は信心叢書の中で「聖者の花」Flos Sanctorum といふのであつた。（ロヨラの傳記作者達は、ルーテルが宗教改革の烽花を擧げた地サクソニヤのルドルフが著、そのサクソニヤを感慨深げに力說する）元來かうした本は彼には凡そ緣遠いもので、最初仲々手にとらうとしなかつたが、ふと取り上げて見て、彼は異常な興味をそゝられた。彼は性來が熱血漢であるから、一旦興味が沸いたとなると、この本が所謂阿片たきこみの書となつた。讀むに連れて、過去の生活と將來のことどもが色々考へ合されて、こゝに彼の「精神的葛藤」の萌芽があつた。彼は既に跛者で、再び軍人として立つことが出來なくなつてゐたから、回復後の所謂生き方を考へてゐた矢先で、今この二つの本によつて何か天の啓示といふやうなものを感じたであらう。時に彼は三十二歲であつた。

彼に考へが熟したといふのではないが、離床後は、日夜冥想にふけり、過去の罪を告白し、熱情は加速度に加はり、判然「キリストの騎士」たらん決心をかため、それには先づ聖地に巡禮し、「聖者の花」に讀みとつた所を地で行かうといふことになつた。過去に於ける罪の贖ひをするためには、神のために偉大な行をするに如くはないと感じた。或る夜目覺めて聖母の姿を見、前生涯に對する嫌惡の情、殊に肉慾に關することで、激しい苦しみを受けた。このやうなことは、取りたてゝいはないが、彼には Acta Quaedam といふ自敍傳があるといふから、さういふものに據るべきであらう。それには英譯その他があるといふことであるが、生憎まだ、讀む機會を持たない。

次いでロヨラは、その附近の有名な巡禮地たるモンセラット Montserrat の修道院を訪ねた。こゝはベネディクチンの修道院で、有名なマリヤの畫像があり、その千年の記念祭が遂二三年前に行はれたばかりであつた。偶々、彼はそこへ行く途中、一ムーア人と道連れになつた。このムーア人から、キリスト教の教義、殊に聖母の童貞といふことに就いて疑をもつて揶揄され、彼は非常な侮辱を感じたが、殘念にも、之を議論で打破ることが出來ず、切齒その場を過した。この經驗は後に、彼の學問尊重といふことになつて表はれてくる。

四

これより先、ロヨラは、このモンセラットの修道院を訪れる前に、巡禮の裝束を調へた。聖ベネディクトの祝日（一五二二年三月二十一日）、愈々修道院に入り、こゝの司祭に生涯の告解をし、又前修道院長なるガルシヤ・ディ・シスネロ Garcia di Cisneroo の Ejercitatoriodela vida espiritual「心靈修業」を讀んでいたく感動した。後に彼は同じ「心靈修業」なる題で耶蘇會員修業の方針を明示したが、こゝにヒントを得たものであらう。（ロヨラに惡意をもつ人々は剽竊だといふのである）俗服は乞食に與へ、三月二十四日の晩聖母の祭壇に劔を供へ、翌早朝、聖體を受け、人の目に觸れない中にそこを立去り、モン

何か始めると熱中するのは彼の持前である。日に七時間づゝ跪いて祈り、一日に三度づゝ痩せ衰へた肉體に鞭を當てた。又暇さへあれば、冥想にふけり、過去の罪を告白し、激情あまつて三日も悔悟に泣きくづれたこともあると傳へる。なほ斷食をし、ありとあらゆる苦行をした結果、幸にして生命に別條なく、剩へ、自分の許へ精神的の忠告を求めて來るものがあつた。而もその人になにがしかの感化を與へ得たといふことが、彼に最早之以上苦行を必要としないといふ自覺を與へた。

ロヨラはマンレサ滯在中、大抵ドミニコ會の修道院の一室に住んでゐた。こゝで將來、耶蘇會なるものを創立する計畫の萌芽があつたらしい。この間に、有名な「心靈修業」が書かれたといはれるが、之は誤謬で、先に擧げた、自敍傳によつて證據だてられるといふことである。彼のマンレサ滯在は約一年つゞいた。

ロヨラの第二の希望は、聖地へ行つて異敎徒に敎を擴めることであつた。一五二三年の春、マンレサを去つてバルセロナへ行き、こゝで約二週間滯在、パドアを經て、ベニスへ行き、こゝの總督から巡禮船に乘せて貰ひ、普通のコースを通つてエルサレムに着いた。聖所を巡禮して、靈魂の救濟に當るつもりでゐた所、彼には資格に缺ける所があつて、同地の管區長から斷呼拒絶せられ、彼のはりつめた希望は傷つけられた。のみならず、フランシスコ會の人々から、輕蔑された。先にもマンレサに向ふ途中ムーア人に恥辱を受け、今又フランシスコ會の人々から輕蔑を受けると、彼はつく〴〵學問の必要なこと

を痛感し、パレスチナから歸る早々學問に身を入れることゝした。

一五二四年一月半ば、ロヨラはベニスに歸着し、それから勉學の目的を以てバルセロナに向つた。こゝで、彼は一婦人（Isabelle Roser といふ人）から學資の補助を受け、又某語學校の校長より無報酬で教授に與つた。こゝで、三十四歳のロヨラは紅顔の少年達と机を並べ、ラテン語の初歩から學び始めた。中年過ぎての語學の學習は餘程困難だつたと見え、その困難を語る傳說のやうなものさへ、殘つてゐる。（Nicolini: History of the Jesuits. 1854.）バルセロナに留ること二年、今後は哲學の勉强を始めるために、樞機卿シメネス Cardinal Ximenes によつて創立されたばかりのアルカラの大學に移つた。こゝに約一年半滯在した。彼の學問も進み、信仰の高まると共に盛に議論を戰はせ、段々人目を引くやうになつた。もうこの頃になると、彼は彼の修業法たる「心靈修業」を口にするやうになつた。所が、彼の言動は疑の目を以て見られ、宗教裁判所の忌憚にふれて三度まで投獄されたほどであつた。當局者は、彼に變つた服裝をすべからず、靴をはいて外出すべし、說教すべからずと注意を與へたが、彼はこゝろよからず思ひ、漂然と徒步でパリーへと出發した。然し、後に彼の有力な同志となるレイネス Jach Lainz サルメロン Salmerón、ボバジラ Nicholas Bobadilha を初めて見たのは、このアルカラである。時に一五二八年の初、彼の數え年三十八歳の時に當る。

五

當時、パリーはヨーロッパに於ける學問の淵叢といはれ、十三世紀に創立されたパリー大學、ラテン區にはよき敎授を集めた學林が林立してゐた。ロヨラはこのパリーの土を踏んだのである。この當時既に耶蘇會創立の意圖があつたといはれ、又まだ夫程の考はなかつたともいはれるが、今パリーに上つたロヨラの當面の問題は、どの修道會に入るべきや、或は一人彷徨生活をつゞけて行くべきやといふ事であつた。

當時のパリー大學は、一萬二千から一萬五千の學生があり、それが各々所謂「放肆と敬虔と熱心の兼ね合ひ」の生活をしてゐた。ロヨラは、一五二八年、パリーに入り、同國人と一緒に下宿生活をし、二年間モンテイグ Montaigu の學林で、古典文學に關する講筵に列した。翌二九年九月、聖バルバラの學林へ移つた。こゝでファン・ペニャの指導の下に哲學の研究にとりかゝつたのである。攝理とでもいふべきか、こゝで、ロヨラは、フランシスコ・ザベリオ、ファーベルと室を共にし寢食を共にすることになつた。（例のカルギンが、この學林に學び、今もこの建物の壁にロヨラとカルギンの名が刻んでであるといふ。）

ロヨラは豫てより徐ろに同志獲得の希望を持つてゐたが、殊にザベリオの如き優秀の人物を望むこと

切なるものがあつた。ザベリオは、一五二五年、ナバール國の悲運を後にしてパリーに留學し、聖バルバラの學林に入つた。學問に於て、運動に於て、風彩に於て、性格態度に於て、斷然頭角を表はし、忽ち人々の尊敬と羨望の的となつてゐた。一五三〇年、哲學の課程を終へて「學士（メイトル）」の稱號を得、ドルマンス・ボーベイの學林でアリストテレスを講ずると共に、更に神學の研究をつゞけ、彼の將來は誠に明るく洋々たるものがあつた。從つて野心も自ら沸き、前途いかなる道を踏むべきかの岐路に立つてゐたのであるが、屢〻イグナチオから「人若し全世界を受くともその靈魂を失はゞ何の益か之あらん」（マテオ傳第十六章第二十六節）のイエズスの言葉を聞かされ、彼は飜然、首垂れてロヨラの膝下に投じた。なほこゝに至るまで、ロヨラのザベリオの爲に盡した心勞といふものは一通りでない。この消息は、一五三五年三月二十五日附、パリ發ファン・デ・アスピルクエタ宛のザベリオ自身の手紙に見えてゐる。

それからヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語に通曉し、才氣完發のディエゴ・レイネス、未だ十九歲の青年ながら學識豐富、而もロヨラを慕つて遙々アルカラから出て來たアルフォンソ・サルメイロン Alphonso Salmeron、熱烈火の如きニコラス・ボバジラ Nicolas Bobadila といふやうな人々が來り投じた。次いで意志の人シモン・ロドリゲス Siman Rodrigz、クロード・ル・ジェイ Cloude Le Jay バスキエ・ブルーエ Pasquier Brouet 等が來り投じた。

最初かうした有爲な人々が、磁石の如くロヨラに吸寄せられるのを、世人は奇異に感じたが、然し彼が鐵石の意志と、深く人の胸に食ひ入る魅力と、我が身を忘れて人のために盡す誠意とがよく人の心を射たのである。

彼は漸時同志が集まつて來ると、幾度か會議を重ね、段々將來に對する計畫も具體的になつて來た。卽ち、使徒の例に倣つて、聖貧と貞潔とを守り、聖地巡禮すべき誓を立てた。とりあへず一五三七年一月聖パウロの改心の祝日まで、パリーで神學の學習をつゞけ、ベニスを經てエルサレムに巡禮し、聖地から歸つたら全身を使徒の生涯に捧げようといふのであつた。一方に傳道の問題が論議された。神の榮光に資することならどんな勞働にも生命を打込むこと、但しこれはエルサレムに行つて決定する、若しエルサレムに行つた上で志が果されぬか、或はベニスに着いて一年以内に聖地渡航の機會がなかつたら、擧げて敎皇に奉仕しようといふことになつた。

六

一五三四年八月十五日、卽ち聖母被昇天の祝日、彼等はモンマルトルの聖母マリヤの天主堂の地下室に集まり、當時、同志中唯一の司祭であつたペトロ・ファーベルがミサを獻て、互に朗々先に決定してゐた聖貧と貞潔を以てイエズスに仕へ、且つ聖地に巡禮すべき誓を立てた。

ロヨラは十全の滿足を感じ、パレスチナへ出發する前、一度故鄕へ歸つて靜養し、同時に日頃の計畫の實現の方法を練ることゝし、パリを發つた。ザベリオ以下の人々は、神學の研究に型のつく迄パリーに留まることゝなつた。ロヨラは、彼等と一五三七年の初、ベニスでの再會を約し、その間、人々から自分たちが如何なる修道會に屬してゐるかと訊かれたら、我々はキリストの兵であるから耶蘇會 Compañia de Jeusus に屬すと答へよと命じた。因に Compañia とは、明らかにロヨラの前生涯の軍隊生活を物語るものであつて、世界の何處たると何時たるとを問はず奉仕しようとしてゐる步兵の軍團を意味するのである。

不在中の統制は擧げてファーベルに一任し、ロヨラは、一但故鄕に歸り、それからバレンシヤ、ゼノアを經て他の人々に先んじてベニスに行つた。こゝでも彼は迫害を受けたが、所謂「ドン・キホーテ」的の情熱でよく耐えた。なほ、彼は後に敎皇パウロ四世としてたつペトロ・カラファ Pierre Caraffa と相識つた。カラファなる人は自ら修道會をおこし、ロヨラはその僧院に同居してゐたのであつた。彼は、新に一宗を創立出來なくとも、日頃抱いてゐた自分の改革案が容れられたらそれで滿足するつもりでカラファに提出したところ、カラファは、ロヨラの動機を疑つて之を退け、己が修道會の修道士として採用すると申出た。ロヨラは斷然之を拒絕し、今度こそ新しい修道會を創設しようと確固たる決心が出來た譯である。

七

ロヨラの伴侶は一五三七年一月ベニスに着いた。聖地に行つて、異敎徒を改宗させるからは生命の犧牲を覺悟してゐた。ロヨラは取りあへず、伴侶を聖地へ向ふ準備として、一つには資金調達のため、一つには敎皇の加護を得んがためにローマへ遣はした。彼自ら出馬しなかつたのは、とかく偏見を持つて迎へられる恐れがあつたからである。

ローマでは、敎皇（パウロ三世）から、以外の優遇を受けた。聖地巡禮のために豐富な布施は與へられ、許可が與へられた。嘗て、ロヨラに反感をもつてゐたオルティスさへ、彼等を敎皇に推薦し、その要求が認可せられんことを斡旋した。剩へ、名義上正式の司祭に擧げられてない彼等のために免許狀さへ與へられた。やがて六月の末、一行は、意氣やう〳〵快報をもつてイグナチオの待ちあぐむベニスへ歸着した。イグナチウスは、再び彼等に永久の聖貧と貞潔とを誓ふことをすゝめた。

然るに彼等がベニスに歸着して一週間後に、ベニスとトルコとの間に戰端が開かれた。先づ當分巡禮船の出る望は打絶えた譯である。已むなく翌年まで、巡禮船を待つことゝし、それまで、或は神學ををさめ、斷食、祈禱に日をおくり、さては各地に散つて傳道に從事した。その六月二十四日卽ち洗禮ヨハネの祝日には、イグナチオを始め、ザベリオ、ライネス、ロドリゲス、コヂューレ等全會員が司祭に擧

げられた。聖地巡禮の機會は遂に來らず、ために、今や同志の人々は、教皇に事情を打明けて新しい奉仕に身を獻げることゝなり、ローマへと道を急いだ。

一五三七年十月、彼等はローマに着き、最初 Trinité dei monti の近くの葡萄畑にあつた小家に住んでゐた。教皇はファーベルには聖書を、レイネスには哲學を、夫々サピエンザ Sapienza の大學で講ずるやう命じた。ロヨラにとつて、活動はやゝ軌道にのつて來たとはいふものゝ、やはり妨害を受けた。然し、位置は既に確立し、計畫も發展し、正面から耶蘇會の創立に專心することゝなつた。

教皇は一行を好遇し、彼等の模範的な宗教的な生活をたゝえ、彼等の計畫に就いて質すところがあつた。彼等が新しい修道會を創立する意のあるところを案示したが、最初それには氣づかれなかつたといふことである。今やロヨラは、同志のものに自らの計畫を判然語つた。同志また異口同音に贊成し、今一つの誓、之はロヨラの目的を達するためには本質的のものであるが、卽ち長上に對し、絕對服從の誓をたてた。

ロヨラは自らの希望が教皇廳で退けられるや、倦まず撓まず教皇を否應いはせない方法を考へた。それは第四の誓で、卽ち教皇に絕對服從し、教皇の命ずる處なら、何時何處へでも速刻行くといふのであつた。そこで彼は請願狀を認め、その中に、彼が目論んでゐる修道會の組織と原則や規則のあるものを記し、大僧正コンタリニ Contalini を通じて提出した。

この第四の誓は教皇の心をそゝつたに相違ない。然し教皇は修道會を惡む心强く、從つてロヨラの耶蘇會も一度は拒絶の運命にあつた。但し一五三九年九月三日、彼等は憲法の草案を提出して判斷を乞ふた所、教皇は「神の指こゝにあり」と感嘆の叫びを擧げたといふ。又教皇の信認の篤かつた三人の大僧正の勸告によつて漸く心動き、(殊に新しき修道會創立の反對者たりしギディチオニ Guidiccioni は「從前の通り予はいかなる新修道會も創立すべからずとの說を抱くものなれども、これを承認しない譯には行かない。實際予は、之をもつて困難にあるキリスト教を助けるに必要と信ずる、殊に現在ヨーロッパを躊躇しつゝある異教を倒さんがために」といつたといふ)(キャンベル)遂に一五四〇年九月二十七日、Societus Jesu なる名稱の下に有名な「Regimini Militantis Ecclesiae」が發せられた。その目的は會員並に隣人の靈魂の救濟と完成である。Societus Jesu は勿論 Compañia de Jesus のラテン譯である。かのルーテルがキッテンベルヒの天主堂の扉に例の抗議を揭げてから既に二十年になる。耶蘇會の人々が同會はルーテルの運動に對する反動でないと主張する所以である。然し、新興の勢力に蠶食されつゝあつた教會が、彼等の出現によつて、如何に氣强く思つたであらう。

序に Jesuits なる言葉、之にはともすれば暗いかげがつけまとつてゐるやうに思へる。通例之は、宗教改革の一方の雄カルギンの發明するところとされてゐる。又他から嘲弄的に「イエズスを我物顏にする人々」といふやうな意味から轉じて「イエズスに忠實な徒」といふやうな意味になり、耶蘇會員自ら

ジュスイトと呼ぶやうになつたといふ。之は宗教改革前二三世紀頃には、普通に使はれた言葉で、ロヨラが負傷して病床中、讀んだサクソニーのルドルフが著「イエズス傳」の中にあり、「我々が洗禮を受けた時、クリスチャンと呼ばれるやうに、榮光に入つた時 Jesuits と呼ばれよう」とある。(Cambellp: The Jesuits. 1534-1921) 然し、この言葉が惡意をもつて使はれたことは事實で、甚しきは「賤民」とか「間蝶」の意味にさへ使はれたのである。

八

一五四〇年九月二十七日、教皇パウロ三世は、正式に耶蘇會の創立を認可した。最初全會員は僅かに六十人と制限を受けてゐたが、之もやがて三年後には撤廢され、彼が死去の際には司祭四十五人、その他の會員二千人を數ふるに至つた。(更に一六三九年には會員總數一萬五千人となつた) 翌年の一五四一年四月五日、會の規約に從ひ、投票によつて總長の選擧が行はれた。折惡しくローマに居合さぬ人々は、使を以て投票したが、時あたかも (四月七日) 印度に向けてリスボンの港をたつたザベリオのそれは、間に合はなかつた。投票の結果は、一票を除く外は、總てロヨラに投じられた。その一票とは無論彼自身のものである。彼は之を不滿とし、再投票を求めた。彼の意志を重んじる所から再投票が行はれたが、結果は同じであつた。因に總長の任期は終身である。晩年、彼は再三辭任を申出たが、遂に意を果

さなかつた。

四月二十二日、San paori la mura の天主堂で、ロヨラは會員全部から第一の誓を受けた。誓を立てた後四十日間、會員は子供や無智な人々のために公教要理を敎へることを命じられ、その上、之から愈々ヨーロッパの各地へ散つて活動を開始することゝなつた。彼等の誓約通り、敎皇の命のまに〳〵何處へでも參り、血みどろの活動に入つた。殊にポルトガルに於ける極端な成功は、寧ろ寒心に價するものがある。前述のグリージンゲルは、この間の消息を仔細に語つてゐる。

なほ、今後、ロヨラの後生涯に殘された事業は、所講「心靈修業」の完成と「憲法」の起草であつた。「心靈修業」は、最初、修業の方法、順序、默想の要點等を、極めて簡單に示したものに過ぎなかつたが、漸時、體系を具へるやうになつた。簡單にいへば、四週間に亙つて行はれる修行の方法で、第一週は淨罪道に當り、この間に己を識り罪を忌み嫌つて全心を淨めることに力をそゝぐ。第二週と第三週とは、光明道に當り、キリストがその私生活、公生活中に示した德を默想して心は强く光に照され、その德に倣ふやうに奮起する。第四週は、融合道と稱すべきもの、キリストの光榮を仰見て、己が終局目的たる天主と靈的愛を以て、深く融合一致するといふにある。（小さきミセル氏編「聖イグナチオの眞意を汲める心靈修業」による）以上の四週を經て罪の中から起上り、神の愛に融合しようといふのであつた。

我々には「心靈修業」といへば、直にロヨラを想起するのであるが、之には自ら據り處がある。彼が

マンレサの洞窟で熱讀したGarcia de Cisneros (d. 1510) のExelcitatorio de la vida spirituel にヒントを得たものである。ロヨラはこの「心靈修業」を漸時修正し、段々筆を加へたが、一五四八年に至つて完成した。ロヨラは最初スペイン語で書き、之が彼の存命中に、既に二度までラテン語に飜譯された。ロヨラの後をついだフランシスコ・ボルジャは、之をパウロ三世に呈し、一五四八年七月三十一日に認可された。

ロヨラの在世中、耶蘇會は、着々實に目覺しい進歩を遂げた。ヨーロッパ各地は勿論、東洋へも傳道の旗を進め、ロヨラ自身はローマに留まつて全活動を指圖した。なほ忘れることの出來ないのは彼等の教育事業である。ポルトガル、スペインをはじめとして全ヨーロッパに夫々、大學、學林、學院を創設した。家庭を持たず、可動性とコスモポリタンは、耶蘇會員の本質であつて、彼等は任地にあれば、その地の言葉を自由に語り、話すことを要求された。

又ロヨラ在世中に於ける耶蘇會に危機があつた。それは一五五六年にカラファが教皇になつたことに起因する。カラファは、豫て耶蘇會改革の意向を持つてゐた。時にロヨラは「予に何の過失なきに、若しさういふ不幸が襲つて來、又耶蘇會が水の中の鹽のやうに解けたとしても、予は十五分間神のことを想ひやれば、予を慰め、予の中に平和を再建するに十分である」といつてゐる。

一五五六年の初、ロヨラは、急に衰へ、同七月三十一日突然歸天した。

なほ彼は一六〇九年、教皇パウロ五世によつて福者に擧げられ、更に一六二八年、グレゴリオ十五世によつて、聖人の列に加へられた。彼の遺骸は、今なほローマなるイエズス寺の北袖廊の祭壇の下に安置されてゐる。